林田盛雄

集

短歌

美しき重心の移動

十三枚

正二位 十、二十五

今日八王子行

帰り

草八丈に来ると

講演に

短篇

美学の重心の移動

妻と母の情人、秋田の語り合う姿をみて、ハッと叫び声を、パーラに駆けると、何かを刺し殺して、妻のめりは窓の外に急き出た。

ダイニングの隣りてたパーラの燈が消れて、闇の領域から覗き上げに、明斜めに映る秋田の、顔かくれの鏡のある顔が、後ろ向きの男の姿に行く。

ドアを射ちたつ程、めりは燈板と帰宅に猫を刺ちたつ程、悲鳴と叫めき乱れた。

お定まりの悲鳴がひびき渡って、甚だ、元禄前の鏡屋で、酷くこうすくんでいた。

あは陣痛を訪あ陣痛を訪あった。

「ハロー」 表扉の前に立って、妻あは声を絞げた。

「ハロー」

「ハロー」

あから、声と情に、扉を開けた主婦の女あは、

「お定まりー。まあめりやく」

林田盛雄

が、入口に立った男で、妙子は驚いて顔うつむ
「どうかしてる、その顔の色つたら、妙子やん
蒼白ぢやないか」
妙子は、思惟は充ちた声で女まがさう叫
んだので、今度、言葉で口まの中望を聞き
掴まえた女の声が顔を移して、なほを見た
ようで、妖婦は顔を見合せた、壁で不審を抱き
た。
「本当に、どうしたかい、妙子やん」
「あ、なんでもない」すると急に泣き替で妹は
「すぐあさくー」と許えて、輩の女中の部
屋の上に、顔をかくして激泣き始めた。
その色静寂に、黄昏の許の坪庭に腰を掛
けてゐた、八十九に成る老の婆が、塗人形
、母の膝前に坐り、「まあ」としやつ
ぱつた。
さうして、四人は暫く、黙つて、別々な憂
さに沈んでゐた。
「妙子は、辺りくらくにゆくつた。が、泣き

林田盛雄

書いた書で、和蘭り巨く言ふのだった。

「お母さんが、お母さんが」

「お母さんが、どうかしー」

羊羹たべ、お母さんは、翻訳はかつぬの。

身の統、髪が、相と、そうしゃうも無く茫然

てゐる夫の姿を眺めてから、思ひ付いた様に

「今、誰か来しゐると、笑つたから、誰声が

「しゐるぢやない、母さと、誰か、

「あのお母さと、和のきこえた、そして、ゆつ

「なあのお父さ、助の声で、一方を飲み込め

た母親さで、誰をかくさめた。

何だ、十太にもたの、あよめさんに行く年寄

ちやないか、ゆすやく、毛も長だなあ

「だってー」ゆすは泣きた様

「だってもー、へすきもないさ」

友さは、悲しく微笑ー。

情に泣き抱き

上げた。

「ゆすやくも、お母さんよりもっと、スイト

ハートを持つたら、ね、あこ、解こ

さあ、泣くのはエーと。お坊ちゃ坊子に」

林田盛雄

斬り捨てて、母の不倫を責め、妻を許さ
うと思ひ、娘の心は、時と共に落ちぬ。
十八の娘の多くが信じ、みやこに、娘よも
母を思ひ唯一の妻の中心とし、
とを誓ひ合ひた。
娘の蛇は、男を知る女、蛇心に無邪気な
る一人の、その母の生活は、母は、妻もう完全に
母を博愛、その若やぐ美さの陰で、母の自由なる
をとりし知ることが出来ずに
十九才の娘どうすることが出来ようか。
娘は、愛の捨て場で、母の言葉一つ、母の蛇心
その手の冷ややかさに、捨てられ、
殺気させられた。
何と言ふ母だろう、
(はに結ばれた)
妻の陰にかくれ、家に住む男が
春の夜の闇に、
娘は、母の事を、
いつとはなく母蛇は、
つた事、
母の本性は、
軍事費から、
業生活に、
(お前の子供は、
ではないか)

良人文雄に、
(母の本性の核心を)
盛雄

その夜遅く、夕食後の筆耕をすませて、世は、流し場から呼びのたった

「お母は、たくさんあるが女、妙子や人」

「ほう、サニキス、まつ」

「どうしてそんなに、もう二日も、

「でも、夏帰かー、我、おるんだ」

寝室の側の衝立に、私を寝て寝て、りこのるる、

「ビヤやまに毒塗ッ、慌ただしく、実にもく

りこんだ。妙子は、眠をつぶった顔で、部屋に

作を移れなかった。、、

いつ帰ったか、世の寝室の燈りが明るく点

いて、牧田と世のそそこと話が聞こえた。

そして寝室に向けに夫は侵で、妙子は壁

を見ていた。

「今年、何を言ったの　写真だ、妙子の口

男子士に　ゆくゆさ、

だからさ、解ってるでやたこ、ね、妙子

ないの手でた。ね、ね、七月ってい、妙子

ちゃんだから、それはこれ　」

世は低声で言った。母は何、完許ります　皆に　それから誓

皆に

林田盛雄

聞いて みた。

× ×

スルスルの前に、桐子を三つ並べて、音の出た和琴とは なるべく離れた等間を、母姫は 林田を膝にして、後ろに 立たせて 前身を抱き締めて 立った。

母の顔を、そっと 姫の 堂を、林田は口 唇を 右手で 撫で、右手で 等差を 抑 [illegible] たり、いろいろ じろり 明り 透す、そうした 後 備 [illegible] 度を 軽く 心 [illegible] 裏に 来ると 良い 逸 [illegible] 始めたら、姫は 感 [illegible] つ見、心外な 忍 [illegible] を、 [illegible] 笠 [illegible] 人 [illegible] 一 [illegible] は 残り ちゃ なかった。

暫くして 母が、

姫 すやく、 くすすすには 何か 欲しと なって [illegible] 言う、

と言って 林田に 意味 [illegible] 日 [illegible]

[illegible] 指を 股に 挿 [illegible] 眠を 姫 [illegible] 目 [illegible] したら

何か ブレ ヤニ に クスス は きより 友さ [illegible]

「 [illegible] 何 [illegible] 、 何 [illegible] 、 何 [illegible] 」

林田は 立たる たと 答 [illegible]

何 [illegible] 、 姫 [illegible] 」

林田盛雄

ミー　何も欲しくない、」きっぱり言って切って、
て　めみは小地な手紙に文字を書きつづって
身の言に　つつむ　でうり　袋に　詰めた。
「めすや、　何だす　その態度は　ナ長い回、
話して　みれば　お母さんに　叱って、
母は　声を　張り上げて　泣くだ　やって　玉手
で　頬を　叩いて、ストーブの　傍に　上る　新聞を　背に　寝
上って、その　傍、　ぶつと　動かしをはもしたいでゐた。
めみは　黙　言葉も　無　めから
めすやく、　どこに　何　行くの、　めすや、
泣く　泣く　ほっぺに　涙が　出た。　めみは　さっさっ
と　表に　戸を　閉　た。　めみは　どこか　淋しく　悲
壇を　何　言いも　なかった。　忍　角　寄り　なかった　なのだ。
めみは　帽子に　外套　行った。　外套の　ポケットに　両手を　突っ込
「はる、　ー　おばさん、　ちょっと　みる」
「ー　ちょ、　ちょっと　ー　先ー　小の　言葉
と　人な　当　言葉　言った
「ちょっと　ちょっと　待って、　ちょっと　ー」
「ちょっと　行かなくて、」
めみは　ちょっと　言って　（おばさん　ちょっと　ちょっと　汽車に

林田盛雄

行こもつて。

「さうあと――。（今俺老婆の、）　整つてあを詩に歩つて
「まだ八時半前――」　やつて詩つた
なる。

「さうを、　　チカチやん　騒くな」
「へう」　　
　　答は　朝子は彼チ　ゆの類を
　　浮べて　明るい　顔で　眺め上げた。

言所の会事　前に言つて、　ゆるは、　思ひ出の　等
会　会　会　場に　等　ト、　自分と、　花　生、　仕　切り　会　の
四　を　場　る　行　会　を　ゆ　め　て　ゐ　た。　ゆ　る　は　つ　も　り　ま　す　の　ま　り
「ハ　ッ　ピ　ー　や　ら　い　お　ゆ　さ　ん　と　言　ひ　ず　に」

「友子は　今年に　驚つた。　這　八　を　取　り　上　げ　た　迫　み　に　ゆ　る　の
「受　け　た　等　の　毛　筆　に　眉　を　顰　め　て、
「ふ、　どうかしたの　お田さん、　だめよゆうちゃん
　友子はしかりつけた。
「お田さんも　学　生　だ　な　の　解　う　方　つ　の　お　田　さ　か
ど　ま　丈　、　ゆ　ち　さ　の　学　に　等　学　し　て　ゐ　る　か　今　会　だ　つ　し
　主　主　に　、　主　ど　う　し　そ　う　も　、　ゆ　さ　く　は　忘　れ　て　た　な　つ
　か　知　ら　ー　ー　」　と　留　意　を　ひ　た。　友　子　は　ゆ　る　の　毛　筆　は　ち　ず　と　文　字　り　つ　し
　か　ら　「ゆ　ち　や　く　ん　と　う　し　て　も　す　ま　さ　と　許　し　ゆ　う　な　ー」

林田盛雄

「お母さん、こんな、又新しい詩を、ねえ、今、
何か、ギカクシナクテモすむの――」
意をけり人さしゆるは顔で声で言った。
妻左は、矣をめるに乗れさしゆる子を出る時急を拝
した。
妙さん、「大丈夫」
「こら、大丈夫よ、おいでなさい――」
妙子は、靴と矣を出さと、矣の手を掴む
ステッキを握った。

、

それ、丘、パーラで詩入でるた。左の夫婦は、
妙子と矣が、多勢から帰って来ると、直ぐ矣を
応接室に連れて入れた。「中中に妙子は
パーラの
ソファに腰を掛けた。
「妙さん」と、左和が坐って板けた。
「あなたが、詩を、詩を、忍こうなんだ」と新
聞を
「お母さんの事をね――老こうやって
それを、左の大分引き伸ばって、詩を言子のだった。
「お母さんが、先ずは、今年、妙ちゃんと、来たとき、

林田盛雄

お父さん、死んだ、女の如く弱かった、どれ程、つくづく思ってきました事か思ったか、お母さんか、あっとそっと、悪い、
なに、お別れ言に君はめてをしたかれど、さう裏切る
お母さんはたしかものやなく、かりにさ、
お前が、志人を撃つ、その志人、どうかって、
死ぬとか、逃げるとか、別れるとか、こっちへ、矢っ張
お前だって、その志人のかばりの男を命令したなる
ん、
だって、お母さんは、ここ、かえるし、
物をの変から、自分辞めを伴かし辞って、
ってって、お母さんだって、矢っ張母さん、母ちゃ
ゆえか、おろかか、無かくらか、、さて、お父さんの
の男を女なんなって、それに、老ってでって
いれ程、あの妖母さんを、お金を出し、おっす奇の
生活や、お母さんを生活を、ハッ、て、ちょっとみるか
府何向った使で、ぬるは、顔を、ソファに寝ころ、特に、無
第6左面、左手に、俺を落とし、何も言は
なかった。涙、涙を抑えるか、ぬ怪に、言葉
も出ず、変怪、怪に、なかなかなかった。

林田盛雄

林田盛雄

筆
筆
筆

妙子の上に寄せて行くこと妙子の類に接吻を浴びせつけた。

私の息子。母、涙を流して、妙子の肩に凭れかかった。

妙子は驚きもせずに彼の動きを見つめていた。

「妙子さん、お母さんを許して、お母さんを悪かったから」

母の声で母が言った。そして姪と兄妹で、妙子の顔に顔を寄せて言った。

「き、何でもない、き、き、妙子を悪かった。き、ー言葉にしない母に姪を抱きかかえたのさう抱いてすてきっくに妙子は言葉にならない気持になって、妙子は、友子夫婦の今迄言葉にならない苦悩に陥り始めつゝに以上来のだった。そこに妙子は破産する「妙子は性に目覚めて、異性に無関心にしかわるやうに、母も立、長年の母の恥、生活の例習に侵されて生活を生活の姪に同化出来ない苦悩の姪にもかゝるのだ。それに母の悩みは、若い自分よりも一層の苦に悩み迫まる者に思えない。

妙子は母の苦しい、類、ブルーの思使に苦しみ、母親の多情の涙を全身で感じるのだった。

妙子は力の限り、面姪を殺げ、母の頭へ巻き姪を巻いた。

林田盛雄

淀田、朝飯の事べ、ねゝは田に行ってかゝに行ケ上、
ゝま、、今妻の日曜に、朝から、何とか山の景色の
良く所に ゼリこりしまゝ、男子、
雑草を集つ、 秋田のおゞさと、 笑ふを乗れ
ゐ入て、見ます、

林田盛雄